

---

# 真夏のこたつ

逢坂十七年蝉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真夏のこたつ

### 【著者名】

Z4331V

### 【作者名】

逢坂十七年蝉

### 【あらすじ】

城南大学新聞同好会では夏になると“怪談酒”がはじまる。

暑い夜に酒を飲みながらの怪談も、中々乙なものだ。

今日もまた、一杯引っかけながらの怪談がはじまる。

「……『真夏のこたつ』って話、知ってる?」

酒の入った大富葵はいつものように怪談を始めた。  
片膝を立てて水晶碗に入った麦焼酎を舐めながらの語り口はなかなかの雰囲気がある。

城南大学新聞同好会恒例の“怪談酒”だ。

恒例といつても今日はオレと大富と小里晶子の三人だけ。二年生三人の気楽な飲み会だ。

同好会が部室として借りている部屋はかなりのボロでクーラーをかけてもあまり効かない。

ただ、暑い部屋で酒を呑みながらする怪談というのもそれはそれで乙なものである。

「今季節にぴったりのタイトルだな」

「稻川淳二みたいに、最後にギャーってな話じゃないでしょうね?」

「違う違う。知り合いの知り合いから聞いたマジの話だつて

「……知り合いの知り合い、なあ」

「スポーツ新聞くらい信憑性がないよね」

オレは大富のこの手の話には慣れっこだ。

大抵、大富の持つてくる怪談は大して怖くない。

それどころか、酔つて即興で作っているのかヤマもオチも何もないこともある。

「もう、本当に怖い話なんだから!」

そう言って大富はひもを引っ張つて蛍光灯を消す。

この時間になると流石に部室棟には誰もいないのが、部屋に差し込む光はほとんどない。

窓からのかすかな月明かりの中で、情趣たっぷりに大富は話を始めた。

「……これは、知り合いの知り合いが本当に体験した話なんだけどね」

意外と城南大学の女子は、モテるの。

理由は簡単で、同じ田白に学習院大学があるからね。

普通の男子大学生はそんなことは知らないから「田白の大学だよ」と言えば簡単に騙されちゃう。

お嬢様と勘違いしてくれれば、後はしめたもの。簡単になびかない深窓の令嬢を気取つていれば、大してデートにも行かずに色々貢いで貰えるらしい。

国際コミュニケーション教育学科のA子もそれで随分と良い田を見てた。

一年の夏からホスト遊びにハマるような子だけ、お金が尽きないの。

「私、アレが欲しい」

A子がひとことそう言つだけで、彼女の“ファン”が貢物を持つてくるから。

貢うのは似たようなデザインの装飾品ばかりにしておくんだって。

質屋に入れても、一つだけ残しておけばデータの時にバレないからね。

長い黒髪に日本人形みたいな顔で、A子はあまり女にモテたことがない男に人気があつたらしい。

中にはストーカー紛いのことをする奴もいたんだけど、別の“ファン”に護衛させて袋叩き。

そんなことをしてもどうこうわけかA子には悪い噂ひとつ立たなかつたんだって。

晶子がオレにギュッと寄り添つてくる。

ベリーショートの髪からシャンプーの良い匂いがする。

オレは晶子の肩に手をまわしてやり、ポンポンと叩いてやつた。まだ付き合い始めて一週間だが、晶子は確かにオレと付き合つていることになつている。

大富はぬるいビールで喉を濡らすと、ゆっくりと続ける。

ある時、A子は小さな失敗をしちやつたの。

ホスト通りの仲間と高田馬場のミヤンマー料理屋で飲んでるところを“ファン”的一人に見つかっちゃつたのよ。

それはA子が“こたつ野郎”って馬鹿にしてる塾講師でね。

団体がでかくて暑苦しいってくらいの意味だと思つたよ。

運悪く、ちょうど悪口言つてるとこにいたの。“いたつ野郎”に聞かれちゃつたんだって。

かなり酷い罵詈雑言で、周りの人が引いたりやつての奴。この塾講師、A子に随分貢いでたらしくてね。多分、300万くらい？

「どうこう」とだーって詰め寄つたらしいのよ。

そりや怒るわよね。私でも怒るんじゃないかな。

でもたまたまA子に助けが入つたの。

ホストね。

同伴出勤するつもりで待ち合わせてたみたい。

「この人、ストーカーなんです！」ってA子がホストに泣きついて、その場は解散。

塾講師はホストが電話で呼んだ怖そうな男たちと黒いワンボックスカーに乗つてどつか行つちゃつたんだって……

「わ、私、ヒ、トイレ……」

席を立つとする晶子の手を捕まえ、オレはそのまま座らせる。最近同好会に入つたばかりの晶子は知らないかもしれないが、“怪談酒”は途中退席禁止だ。

「もうすぐ良い所じゃないか。ちょっとくらい我慢しinよ」「で、でも……」

オレは大宮に領を、続きを促す。

次の日の朝、ゴミ収集車が新大久保駅近くの粗大ごみ置き場で、妙なものを見つけたの。

真夏なのにね、こたつが捨ててあつたのよ。

それも、捨て方が変なのよね。

普通に部屋に置いてあるみたいにしてあつて、こたつ布団まで掛つてるの。

ちょっと気持ち悪いわよね。

しかも凄い臭いがするの。蠅もいっぱい集つてるし。

でも、ここで時間をかけると次の場所に回れないからって、職員は掛け布団を持ち上げたの。

そしたらね……

中には、バラバラの塾講師が入つてたんだって。

晶子はかわいそなぐらい真つ青になつて、小さく震えている。

「…………どうしたの、晶子ちゃん。そんなに怖かつた?」

「晶子は本当に怖がりだなあ」

「わ、わた、私は……」

腰が抜けたのか怯えた様子で後退る晶子の腕を掴み、オレは無理やり引き寄せる。

「なあ大宮、この話には、まだ続きがあるんだろう?」

「ええ、そうなのよ。この大宮つていつ塾講師には妹が一人いてね……」

あなた、『真夏のこたつ』って話、知ってる?  
この大学の七不思議の一つなんだけどね。  
暑い夏の朝に大学の粗大ゴミ置き場に行くと……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4331v/>

---

真夏のこたつ

2011年10月8日04時41分発行